

創学舎ニユース

No.239

世界が敵に

まわった日(その7)

さて、病院通いの長かった私であるが、その病気を治してくれた恩人がいる。鹿児島県川内市で小児科医院を開業していた「関先生」である。彼は名医であったと思う。県内で最大の都市である鹿児島市は、医療機関も充実していたのだが、その鹿児島市から「関先生」の所に通う患者(子供)が相当数いた。母が、交通費もないのに私を連れて行ったのは、その名声にひかれてのことだった。生まれてから中学三年の夏まで、私は何回通ったことだろう。恐らく百回ではきかない。

「関先生」のことは今でもよく覚えている。冗舌ではないが、誠実で、患者への愛情に満ちており、しかし冷静で、彼の前に行くと、私の心は静まるのであった。また、彼の手が、これが本当に素敵で(美しいとかしなやかということではなく)、私には「神の手」のように思えた。あたたかくて、力強く、彼の手が私の体に触れると、それだけで元気になるような気がした。人の手とは、人の手とは、こんなにも素晴らしいものかと思った。「もう通院しなくてもいいよ。大丈夫だよ。」

と、中三の時に言われたとき、私は嬉しかったのだが、でもどこかで淋しさも感じていたような気がする。先生の声も、あの手も、待合室にかけてあった油絵も、このにおいも、もう二度と触れることはないのか。そして、私は、先生にお礼を言えなかった。いや、言ったのだが、十数年間親身に治療していただいたことに対して、その言葉は余りにも粗末であったのだ。そう、「もうここに来れなくなる淋しさ」がきつと邪魔をしたのだった。

それからの私には、宿題ができてしまった。関先生にお礼を言おう。心からの感謝を伝えよう。早く立派になって彼に会いに行こう。そして、今。その宿題は果たせぬままこうして彼のことを書いている。とうに、亡くなってしまった。悔やんでも仕方のないことだが、時折思い出している後悔している。

例えば、私はこんな後悔の仕方を何度もしている。本当に情けないが、来夏こそは、まずは彼の墓参りを果たしたい。私の生を支えてくれた人達の一人…。今回は、「関先生」のことでした。(以下次号) (小林)

「親子の関係」は、「世界が敵にまわった日」が終了後再開です。

教育「名言」の紹介(13)

教育ある人とは、ゆえに愛憎の正しい人のこと

である。これをわれわれは見識と呼ぶ。

《出典》林語堂りんごどう(中国 一八九五 - 九七六)『生活の発見』

解説 『生活の発見』は、欧米人に対して、中国人的な生き方やものの見方、考え方について著者の見解を披瀝した書で、アメリカでは発表当時から四〇版以上を重ねるロングセラーとなっている。

『生活の発見』は堅苦しい哲学書ではなく、人生の諸事百般にわたって楽しみを見出すことを縦横無尽に語ったエッセイである。そこでは、アメリカ人につきものの成功主義の哲学とは明らかに異なった、何も達成しなくても十分幸福かつ閑適な生活(シンプルライフ)を楽しむ中国の文人や庶民の知恵が開示されている。

さて、そのような本書における教育名言の最右翼は、第一章「教養の楽しみ」にある「教育ある人とは、ゆえに愛憎の正しい人のことである。これをわれわれは見識と呼ぶ」である。

林語堂は、「教養のある人とか理想的に教育された人とは、かならずしも多読の人、博学の人のことではなく、事物を正しく愛好し、正しく嫌悪する人のことである」と言う。「愛憎の正しい」とは、何をよしとし何をよしとしないかの判断力、鑑識眼を持つことである。例えば、学識や学殖はあるが知識やデータに対する明察洞見を欠き、判断に独創性や深みがないとすれば、

その人は学識があっても見識はないことになる。林語堂は、見識と勇氣の関係についても、紙幅を割いて力説する。芸術や学術において独創性を発揮するような人々は幼年時代から、欺瞞的威嚇や通説、流行などに惑わされることなく自分自身の目で見、頭で考え、毅然と自分自身の判断を下す人だったのである。たとえ幼い子どもであっても、自分はなぜそれをよしとするのかを堂々と公言できるような素朴な自信、自信のこもった自我を育てることこそが理想的な教育であるところからは読み取れるのである。

(アガトス教育研究所)

私が学んだこと

今年の八月、内観法の研修を受けてきました。内観法とは、吉本伊信という人が人格統治法として確立したもので、自分自身を知り、幸せに生きることを目標としています。(いかがわしい宗教などは違います。)

自分が今幸せかどうかは、自分のものの見方、感じ方、考え方、そして他者との関わり方によって左右されるものです。もし幸せに感じられないとしたら、自分のどこに問題があるのか、今まで生きてきた道を振り返って探り、幸せの道を模索する方法、それが内観といえるでしょう。

では具体的にどのようなことをするのかとい

うと、期間は一週間、テレビなどの刺激を受けない小部屋に一人で、朝の五時から夜の九時までの間(食事などの時間は除く)、ただひたすら静かに座って以下のことを黙って考える。

それは、自分が生まれてから今までのことを小学校入学前、小学校低学年、高学年、中学校、高校、大学というふうに区切り、自分にとって身近な人達とのこと(母、父、兄弟姉妹...)について思い出ししていきます。その一人ひとりについて

その人からしてもらったこと

その人にしてあげたこと

その人に迷惑をかけたこと

の三点について思い出していくのです。テーマは他にもありますが、まずこれらから始めます。

さて、実際に私自身がこの研修を受けてどのようなことを学んだかを述べましょう。まず一人ひとりの人にしてもらったことが非常に多いということに気がされました。特に親については、食べさせてくれたこと、服を買ってくれたこと、おこづかいをくれたこと、高校や大学に行かせてくれたことなど、きりがなくいくつも多くのことをしていただきました。あたりまえと思うかもしれませんが、自分が親の立場だったらと考えるとこれは実に大変なことなのです。親はだいたい三十代から五十代、人生の多くを子供を育てるために費やすのです。親の人生の

上に自分の人生があるのです。

人は往々にして、してもらえなかったことに目がいってしまつてしまうのですが、視点をほんの少し変えるだけで見え方が変わるので、私自身は「足るを知る」ことの意味が少しわかったような気がします。

次にしてさしあげたことですが、これがまた何と少ないことか。特に自発的にしてさしあげたことは本当に少ない。愕然としました。人はいつの間にかしてもらつことがあたりまえになつてしまい、自分から何かを他者のためにしてあげることを忘れてしまつことがあるのではないのでしょうか。もらいつばなしの人生、いかに自己中心的であつたことか、そのことに気付かせてくれただけでも、この研修を受けてよかったと思います。

そして、迷惑をかけたことですが、これは言うまでもなく大変多くの人に迷惑をかけてきました。人は気付かないうちに実に多くの迷惑を周囲の人に対してかけてしまつているのではないのでしょうか。そしてそれに気付かないまま生きていくというのは、何と傲慢で愚かなことか。他者の対場立つてもものを見ることができない、それでは人間関係もうまくいくはずがありません。(以下次号) (長谷川)

興味を持つ

私は毎月雑誌「NEWTON」を読んでいる。今月号は生物の進化についての特集があつた。ふと目を引いたのが、鼻の進化についてであつた。人間の鼻は呼吸すること、においを感じることに必要である。では魚はどうか。魚はもちろんえら呼吸である。だから魚の場合、においを感じるだけである。そのにおいを感じるのには、四つある鼻のうち二つの鼻から水を吸い込み、においを感じたあとの水は残りの二つの鼻から出すのである。「ほつ」と思った。

また、新書で読んだことだが、自然界に生きるほとんどの哺乳類は子どもが独り立ちができる程度に成長したとき、親は子を自分のもとから追い出す。そうして子は独り立ちしていく。残酷なようだが、そうしなければ子は独り立ちできない。ひいては種の存続ができないのである。既に知っていることだが、その過程を読んでいるうちに「なるほど」と思う。そんな大したことではないが、些細な関心をしたくて本を読む。それが興味というものだろう。

かくいう私もこれらの本を興味を持って読み出したのはそんな昔からではない。学生の、特に高校生まではほとんど興味を持って読んではいなかった。本当はもっと小さい頃に興味を持って取り組むべきである。情けないものである。今私は「教える」ということをしながら、この興味を自分ではない人間に持つてもらつこと

の困難さを痛感している。なぜなら「興味」とはその人自身の自発的なものだからだ。これは「夢」にも通ずる。例えば「勉強」である。勉強が好き人はほとんどいない。その勉強に興味を持って取り組むことができる人はごく僅かである。でもしなければならぬ。それは人が成長するために必要だからである。知識を身につけるだけではなく、物事の考え方を身につける、その過程を乗り越えることによつて忍耐力を身につける等、社会に出て人と人との関係をスムーズにするために重要なことを身につけることができるのである。しかし勉強をするべき本人はそんなことを自覚してはいないことが多い。学校を卒業し、社会人として行動している人でもである。生徒ももちろんのことである。ただ生徒には受験というものがあつて、本人が嫌でも勉強をしなければならない時期が来る。その時嫌な勉強をやるように手伝つのが私たちの仕事である。時には叱咤激励し、時には優しく接したり、様々な手法を使う。私たちとのやりとりを通して、勉強に、ある科目の特定分野でもいいので、興味を持ってもらえればと思つている。(岡本)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、「ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。」